

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Germline BHD-mutation spectrum and phenotype analysis of a large cohort of families with Birt-Hogg-Dube syndrome	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドラインでの目次名称	CQ1	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタ分析 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (1)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Am J Hum Genet	
	雑誌 ID		
	巻	76	
	号	6	
	ページ	1023-1033	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本文語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	2005		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Schmidt LS	Basic Research Program, Science Applications International Corporation, Frederick Inc., and Laboratory of Immunobiology, Center for Cancer Research, National Cancer Institute (NCI), Frederick, Frederick, MD; Genetic Epidemiology and Genetics, NCI, Rockville, MD;
	その他著者 1	Nickerson ML	
	その他著者 2	Warren MB	
	その他著者 3	Glenn GM	
	その他著者 4	Toro JR	
	その他著者 5	Merino MJ	
	その他著者 6	Turner PL	
	その他著者 7	Choyke KL	
	その他著者 8	Sharma N	
	その他著者 9	Peterson J et al.	
その他著者 10	Morrison P et al.		

一次研究の 8 項目	目的	Birt-Hogg-Dube 症候群家系の大きな集団における生殖細胞系 BHD 遺伝子の突然変異スペクトルと表現型分析	
	研究デザイン	Evidence level 1b	
	セッティング	Basic Research Program, Science Applications International Corporation, Frederick Inc., and Laboratory of Immunobiology, Center for Cancer Research, National Cancer Institute (NCI), Frederick, Frederick, MD; Genetic Epidemiology Branch, Division of Cancer Epidemiology and Genetics, NCI, Rockville, MD; Laboratory of Pathology, Dermatology Branch, Diagnostic Radiology, and Urologic Oncology Branch, Center for Cancer Research, NCI, National Institutes of Health, Bethesda; Clinical Genetics, Belfast City Hospital Trust, Belfast; and Section of Medical and Molecular Genetics, Institute of Biomedical Research, University of Birmingham, Birmingham, United Kingdom	
	対象者	米国 NCI の Birt-Hogg-Dube 症候群調査に参加した 61 家系の患者のうち 20 歳以上の患者	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍別区別せず (3)	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢別区別せず (22)	
	介入 (要因曝露)	BHD 遺伝子シークエンス	
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
		1	BHD 遺伝子の突然変異分析
	2	BHD ハプロタイプキャリアー分析	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
	3		1.主要 2.副次 3.その他 ()
主な結果	BHD で 52 家系のうち 22 発癌者から、エクソン 11 内の C8 中のシロンの挿入/削除の突然変異を認め、エクソン 11 が hypermutable な "hotspot" であることが示された。全家系の 84% (51/61) で、生殖細胞系 BHD 突然変異をコード領域の全長に沿って確認した。16 個の挿入/削除、3 個のナンセンス、と 3 個の splice-site の突然変異を含んでいた。大多数の BHD 突然変異は、BHD タンパク質(フォクリン)のトランケートを生じると予測された。生殖細胞系突然変異が、BHD に影響を与えるハプロタイプを持つ 53 家系中 24 家系 (45%) に、腎臓癌患者が少なくとも 1 人はいた。家族性腎オンコサイトーマの 3 家系で BHD 突然変異が同定された。これはこの珍しい型の腎臓癌生物の原因遺伝子を示した最初のものである。		
結論	この研究では、Birt-Hogg-Dube 症候群家系における BHD 遺伝子の突然変異スペクトルについて詳述し、遺伝子型-表現型相互関係を評価した。		
備考			
レビューワー氏名	山崎一郎(鎌田雅行)		
レビューワーコメント	遺伝性腎臓癌の原因の一つとして、BHD 遺伝子異常が存在することが示された重要な論文である。		

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Evaluation of renal masses detected by excretory urography: Cost-effectiveness of sonography versus CT	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドラインでの目次名称	CQ2	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタ分析 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (4)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	AJR Am J Roentgenol	
	雑誌 ID		
	巻	164	
	号	2	
	ページ	371-375	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本文語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	1995		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Einstein DM	Division of Radiology, Cleveland clinic
	その他著者 1	Herts BR	Foundation,9500 Euclid,Cleveland
	その他著者 2	Weaver R	
	その他著者 3	Obuchowski N	
	その他著者 4	Zepp R	
	その他著者 5	Singer A	
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	排泄性尿路造影で発見された腎臓癌の評価に対する超音波検査 (US) と CT 検査の費用対効果について比較する	
	研究デザイン	Evidence level 3b	
	セッティング	Division of Radiology, Cleveland clinic Foundation,9500 Euclid,Cleveland	
	対象者	排泄性尿路造影で腎臓癌を発見された患者 225 例 平均年齢 67 歳 (31-93)	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍別区別せず (3)	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢別区別せず (22)	
	介入 (要因曝露)	排泄性尿路造影後 3ヶ月以内に US、もしくは CT を行っている。CT は 5mm スライスで撮影。超音波検査の費用は\$105.49、CT は \$350 で計算。	
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
		1	腎臓癌の大きさ、部位によって超音波検査での診断がつけられない症例の割合が変わるかどうかを検討
	2		1.主要 2.副次 3.その他 ()
	3		1.主要 2.副次 3.その他 ()
	4		1.主要 2.副次 3.その他 ()
	5		1.主要 2.副次 3.その他 ()
	6		1.主要 2.副次 3.その他 ()
主な結果	176 例が最初に US を受け 144 例(82%)は US のみで確定診断に至ったが先発性腫瘍の 6 例には CT で確認した。32 例が complicated cyst で CT で評価した。49 例が最初に CT 検査を受け、43 例(88%)が CT のみで確定診断に至った。残りの 6 例に US を追加した。最初に US を受けた 70%の患者に CT が必要であれば、CT を最初に施行したほうがトータルコストが安くなる。そこで US を最初に CT を必要とした症例の割合を部位別、大きさ別に検討したところそれぞれ有意差はなく 3cm 以下かつ腎上極において 39%と他の部位、大きさより高い割合で CT を必要としたが 70%には届かなかった。		
結論	排泄性尿路造影で発見された腎臓癌についてはサイズや部位に関わらず先に US を行い確定診断がつかなかった症例に対して CT を行うべきである。		
備考	特に必要とは思わない		
レビューワー氏名	松村壽昭 (田中雅博)		
レビューワーコメント	比較するコストがアメリカの施設での比較であり日本のガイドラインにはそのままは当てはまらない。腎臓癌の診断は画像診断で確定診断がなされており、病理学的診断は行っていない。		

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Can dipstick screening for hematuria identify individuals with structural renal abnormalities? A sonographic evaluation.	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	CQ2	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタ分析 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (3)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Scand J Urol Nephrol	
	雑誌 ID		
	巻	30	
	号	1	
	ページ	25-27	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	1996		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Emamian SA	Dept. Radiology, Glostrup Hospital, Univ.Copenhagen, Denmark.
	その他著者 1	Nielsen MB	
	その他著者 2	Pedersen JF	
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	尿潜血試験紙によるマス・スクリーニングの、腎形態的異常の診断における有用性について prospective に検討する。	
	研究デザイン	Evidence level 2b	
	セッティング	Dept. Radiology, Glostrup Hospital, Univ.Copenhagen, Denmark.	
	対象者	尿潜血試験紙によるマス・スクリーニングを含む成人検診を受けた成人ボランティア 1775 名のうち、無作為に抽出した 686 名。月経中あるいは腎手術既往者、検査不良例は除外。	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍別区別せず (3)	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女別区別せず (3)	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢別区別せず (22)	
	介入 (要因曝露)	腎を対象とした超音波検査を、3.5MHz プローブを用いて、仰臥位ならびに腹臥位で実施した。なお尿沈渣は系統的には行っていない。	
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
	1	試験紙による尿潜血反応の陽性頻度	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
2	超音波検査による腎の形態異常の頻度	1.主要 2.副次 3.その他 (1)	
3		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
4		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
5		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
6		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
主な結果	①尿潜血陽性率は、全体で 30 名 (5%)、年齢階級別では、30 歳代、40 歳代、50 歳代、60 歳代、70 歳代それぞれ、2%、5%、4%、6%、6%、性別では男性 3%、女性 6%であった。 ②腎の形態異常の頻度は 56 名 (8.5%)、尿潜血陽性例では 10.0%、陰性例では 8.4%で、両者間に有意差はなかった。 ③対象者のうち、腎悪性疾患は腎細胞癌の 1 例のみで、尿潜血は陰性であった。		
結論	尿潜血試験紙による尿潜血のマス・スクリーニングは、超音波検査で検出されるような腎形態的異常の検出に何ら寄与しない。		
備考			
レビューワーコメント	レビューワー氏名	伊藤文夫	
	レビューワーコメント	①対象症例が少数である。 ②腎細胞癌のみを対象とした検討ではない。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Microscopic hematuria as a screening marker for urinary tract malignancies	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	CQ2	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタ分析 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (4)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Int J Urol	
	雑誌 ID		
	巻	8	
	号	1	
	ページ	1-5	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	2001		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Sugimura K	大阪市立大学泌尿器科
	その他著者 1	Ikemoto SI	
	その他著者 2	Kawashima H	
	その他著者 3	Nishisaka N	
	その他著者 4	Kishimoto T	
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	無症候性顕微鏡的血尿は尿路上皮癌や腎細胞癌のスクリーニングに有用であるかどうか、また、早期発見につながるかどうかの検討	
	研究デザイン	Evidence level 3b	
	セッティング	大阪市立大学泌尿器科	
	対象者	1) 泌尿器癌 349 例 (腎細胞癌 113 例、腎盂尿管癌 51 例、膀胱癌 185 例) 2) 無症候性顕微鏡的血尿を有する 823 例	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍別区別せず (3)	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女別区別せず (3)	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢別区別せず (22)	
	介入 (要因曝露)	1) 検尿 2) 腎細胞癌あるいは尿路上皮癌の診断	
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
	1	腎細胞癌あるいは尿路上皮癌の患者において、血尿の有無について調査した。	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
2	無症候性顕微鏡的血尿を有する患者のうち、腎細胞癌あるいは尿路上皮癌の患者の比率を調査した。	1.主要 2.副次 3.その他 (1)	
3		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
4		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
5		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
6		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
主な結果	検尿は尿路上皮癌においては有用なスクリーニングであるが、腎癌では有用とは言えない。しかしながら一回りの検尿によるマススクリーニングが尿路上皮癌の早期検出に役立つとは考えにくい。 1) 肉眼的血尿と顕微鏡的血尿の双方を含んだ血尿全体での感度は腎癌 35%、腎盂尿管癌 95%、膀胱癌 94%であった。顕微鏡的血尿のみの感度は、腎癌 18%、腎盂尿管癌 24%、膀胱癌 15%であった。腎癌において肉眼的血尿の頻度と T stage の間に有意差を認めたが、その他では血尿と T stage の間には相関はなかった。 2) 無症候性顕微鏡的血尿の PPV は、膀胱癌 1.7%、上部尿路上皮癌 0.4%、腎細胞癌 0.2%であった。60 歳以上の男性に限れば、PPV は、膀胱癌+上部尿路上皮癌で 6.2%であった。		
結論			
備考			
レビューワーコメント	レビューワー氏名	武中 篤	
	レビューワーコメント	血尿の感度と PPV について述べた論文であり、実際の臨床での印象と合致する。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Prevalence of renal cell carcinoma in patients with ESRD pre-transplantation: A pathologic analysis	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドラインでの目次名称	CQ3	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタアナリシス 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (4)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Kidney Int	
	雑誌 ID		
	巻	61	
	号	6	
	ページ	2201-2209	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
	原言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)	
	発行年月	2002	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Denton MD et al.	Department of Medicine, Brigham and Women's Hospital, department of Nephrology, Department of Pathology and Department of Surgery, Massachusetts General Hospital, Harvard Medical School, Boston, Massachusetts, USA
	その他著者 1		
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の8項目	目的	腎不全患者の腎細胞癌有病率の検討	
	研究デザイン	Evidence level 3b	
	セッティング	Department of Medicine, Brigham and Women's Hospital, department of Nephrology, Department of Pathology and Department of Surgery, Massachusetts General Hospital, Harvard Medical School, Boston, Massachusetts, USA	
	対象者	腎移植を行った 349 症例のうち、移植と同時に自己腎の摘除と、腎盂尿管吻合術を行った 260 症例。	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍別せず (3)	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (22)	
	介入 (要因曝露)	摘除した自己腎標本を 0.5cm スライスに切して肉眼的にのうと腫瘍の観察を行い、腫瘍部分とランダムに選択した箇所 (3~5カ所) を HE 染色、PAS 染色を行い組織学的評価を行う。	
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
	1	後天性腎囊腫性疾患、腎腺腫、腎細胞癌の有病率	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
	2	単変量、多変量解析	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
	3		1.主要 2.副次 3.その他 ()
レビュワーコメント	主な結果	後天性腎囊腫性疾患は腎不全患者の 33%(85/260)が罹患しており、単変量解析によって高年齢、男性、血液透析、糸球体腎炎 (原疾患) が有意なリスクファクターであった。多変量解析では男性、透析期間(長期)が有意なリスクファクターであった。腎腺腫は腎不全患者の 14%(35/260)が罹患しており、単変量解析で高年齢、男性、透析期間は有意なリスクファクターであった。原疾患では糸球体腎炎が有意に高罹患率であったが、その逆に結核性腎症は低罹患率であった。多変量解析では高年齢、男性、透析期間が有意なリスクファクターであった。腎細胞癌は後天性腎囊腫性疾患を有意に合併した (odds ratio 3.8)。腎細胞癌は腎不全患者の 4.2%(11/260)が罹患しており、単変量、多変量とも年齢のみが有意なリスクファクターであった。男性、透析期間は n が少ないため傾向であるのみであった。腎腺腫は後天性腎囊腫性疾患 (odds ratio 6.0) や腎腺腫 (odds ratio 38.6) を有意に合併した。	
	結論	移植前の腎不全患者の腎には以前より指摘されていた以上に腎細胞癌の有病率が高い。今回の検討で腎細胞癌のリスクファクターが確認できた。これにより腎不全患者の腎細胞癌スクリーニングの有益な方法を見つけることができるかもしれない。	
	備考		
	レビュワー氏名	藤澤光明	
レビュワーコメント	腎移植時に同時に両側の自己腎を摘除した結果、移植前の腎不全患者の腎には以前より指摘されていた以上に腎細胞癌の有病率が高い 4.2%(11/260)。これらの腎癌患者の移植前の透析期間は平均 3.6 (0-10) 年であり、日本に比較すると短く、したがって日本ではさらに高い可能性がある。しかしながら腎腺腫を有した腎組織が 11 症例のみで、そのリスクファクターを検討するためには n が少ない。		

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Renal cell and transitional cell carcinoma in a Japanese population undergoing maintenance dialysis	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドラインでの目次名称	CQ3	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタアナリシス 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (4)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	J Urol	
	雑誌 ID		
	巻	174	
	号	5	
	ページ	1749-1753	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
	原言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)	
	発行年月	2005	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Satoh S et al.	秋田大学医学部泌尿器科および関連施設 (合計 38 施設)
	その他著者 1		
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
その他著者 7			

一次研究の8項目	目的	維持透析患者に発生する腎癌(RCC)および尿路上皮癌(TCC)の頻度、臨床上の性格、予後に関して検討する。そして Australia, New Zealand のデータと比較する。	
	研究デザイン	Evidence level 3b	
	セッティング	秋田大学医学部泌尿器科および関連施設(合計 38 施設)	
	対象者	全部で 38 の秋田大学医学部泌尿器科および関連施設にて維持透析施行中の患者	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍別せず (3)	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (22)	
	介入 (要因曝露)	Retrospective に medical record を調べ、症状、診断に至った契機、治療、組織診断、転帰、そして死因について検討する。これらのデータを 1980 年から 1994 年までの 13,497 人の透析患者を登録した Australia and New Zealand Dialysis and Transplant Registry (ANZDATA) と比較する。	
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
	1	症状、診断に至った契機	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
	2	治療、組織診断、転帰、死因	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
	3		1.主要 2.副次 3.その他 ()
レビュワーコメント	主な結果	6201 人中 38 人の RCC 患者と 16 人の TCC 患者 (5 人が上部尿路癌、5 人が上部尿路癌と膀胱癌の両方、そして 6 人が膀胱癌) がみられた。RCC の主たる基礎疾患は慢性糸球体腎炎(68.4%)で、TCC は膀胱癌性腎炎 (43.8%)、23 人の RCC(60.5%)は無症状でスクリーニングで発見されたが、TCC は 13 人(81.3%)が肉眼的血尿で、3 人(18.7%)は疼痛、発熱にて発見された。RCC の 34 例(89.5%)が stage 1 で 4 例(10.5%)が stage II-IV、上部尿路の TCC は stage 0a-1 が 5 例(50%)が Ta-T1、stage II-IV が 5 例(50%)。膀胱の TCC は 4 例が 0a-1 例(66.7%)、2 例が II-IV(33.3%)。RCC の治療は 33 例 (86.9%)、手術が 1 例 2.6%、4 例は経過観察とした。TCC は放射線治療が 1 例(%)が Ta-T1、経尿道的切除が 4 例(50%)。膀胱全摘が 3 例、腎管全摘が 4 例(66.7%)、無治療経過観察が 4 例であった。38 例中 4 例が RCC にて死亡、7 人が他因死であった。over all の RCC の 5 年生存率は 78.6%、TCC は 21.1%であり、RCC の Cause specific の 5 年生存率は 78.6%、TCC は 29.5%であった。Relative risk は RCC が 21.21, p=0.013, TCC は 12.16, P=0.021 であった。ANZDATA と比較すると日本では RCC が多く見られた。日本では腎移植の件数が根拠があり、その結果、長期の透析患者が増加しており、RCC の増加が懸念されている。今回の透析患者の RCC は 0.61%に腎癌が発生し、TCC(0.26%)と比較して多い ANZDATA では長期透析患者が少なく、原疾患として toxic nephropathy が多い結果、腎癌が少なく、透析患者も多くなっている。	
	結論		
	備考		
	レビュワー氏名	湯浅 健	
レビュワーコメント	合衆国のデータは腎癌と腎蓋がんが同様の項目にあり、日本のデータと比較していく一つの要因となっている。本研究は残念ながら症例数こそ少ないが、透析患者が透析患者における腎癌と腎蓋癌の発生、頻度、その他の特徴をあきらかに示した点で意義がある。		

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Fifteen-year follow-up of acquired renal cystic disease - A gender difference	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	CQ3	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタ分析 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (4)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Nephron	
	雑誌 ID		
	巻	75	
	号	3	
	ページ	315-320	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	1997		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Ishikawa I et al.	Division of Nephrology, Department of Internal Medicine, Kanazawa Medical University, Japan
	その他著者 1		
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	10 年から 15 年の長期維持透析患者の後天性腎嚢胞性疾患(acquired cystic disease of kidney: ACKD)のサイズの経過観察と性差による違い、腎癌の発生について prospective に検討する	
	研究デザイン	Evidence level 3b	
	セッティング	Division of Nephrology, Department of Internal Medicine, Kanazawa Medical University, Japan	
	対象者	1979 年時点で慢性糸球体腎炎を疾患とし、腎不全となり維持透析施行中の 96 例をエントリーした。腎移植施行患者が 15 例、死亡 37 例、阿耨腎摘 4 例 (3 例が RCC、1 例が腎嚢胞)、不明 3 例を除外した結果、最終的には 15 年間の維持透析を施行した 38 例を評価した。	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍別せず (3)	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (22)	
	介入 (要因曝露)	ACKD のサイズの代わりに腎臓のサイズを腹部 CT にて毎年経過観察する。機器は Siemens, Toshiba, Yokogawa のものを使用。CT 写真上で、腎嚢を除き、後天性腎嚢胞を含む腎実質の輪郭を紙に写し、それをはさみで切り取って、analytical microbalance (Sartorius, Germany) でその紙の重量を測定。腎実質領域の紙の重量は、以下の方程式で計算。体表面積 × 写した腎実質の紙の重量 / 写した体表面積の紙の重量。	
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
	1	腎実質領域の仮想重量を男女間、透析経過期間 (10 年と 15 年) の比較と評価	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
2		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
主な結果	透析 10 年、15 年経過時点での腎重量はいずれにおいても男性の方が女性よりも有意に大きかった。また、透析 10 年、15 年経過時点の腎重量を比較すると男性、女性とも 15 年経過時点の方が有意に腎重量が大きかった。透析 10 年から 15 年経過にかけての腎重量の増加率は男性で 1.26 ± 0.39 倍、女性で 1.43 ± 0.45 倍で、両者間には有意な差はなかった。男性は透析歴 13 年を経過すると腎重量の増加が緩慢となるが、女性は透析期間が 17.7 年経過時点でも有意に腎重量が増大してきており、男性と比較して遅延して腎重量が増加する。透析 10 年と 15 年経過時点と比較すると、透析効率は男女とも有意差はなく男女差の原因は不明である。観察期間中、RCC は 6 症例 (うち 5 症例は男性) に発生し、発生率は 1/245 人と高率であった。		
	ACKD の発症には男女差があり、男性は早期に発症し、13 年を過ぎると緩慢となるのに対して、女性の透析患者は遅延してゆっくりと増大し、17.7 年経過時点でも発症し続けている。後天性腎嚢胞に発生する腎癌は男性に多い。		
	ACKD の発症を prospective に経過で観察され、性差による違いを求めたのには評価できるが、結局 15 年間の経過観察が完了したものは 39 例であり、症例数が少なく、また ACKD の大きさ、増大の仕方による性差があることが臨床的にどのような意味があるのか、腎癌の発生と関連するのかが不明である。ACKD と腎癌、特に「どうして ACKD の腎癌が男性に多い？」という説明には至っていません、仮説もない。		
	ACKD の発症を prospective に経過で観察され、性差による違いを求めたのには評価できるが、結局 15 年間の経過観察が完了したものは 39 例であり、症例数が少なく、また ACKD の大きさ、増大の仕方による性差があることが臨床的にどのような意味があるのか、腎癌の発生と関連するのかが不明である。ACKD と腎癌、特に「どうして ACKD の腎癌が男性に多い？」という説明には至っていません、仮説もない。		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	齋藤 謙	
レビューワーコメント	レビューワーコメント		

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Present status of renal cell carcinoma in dialysis patients in Japan: Questionnaire study in 2002	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	CQ3	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタ分析 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (4)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Nephron Clin Pract	
	雑誌 ID		
	巻	97	
	号	1	
	ページ	c11-c16	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	2004		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Ishikawa I	Division of Nephrology, Department of Internal Medicine, Kanazawa Medical University, Japan
	その他著者 1		
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	日本における透析患者に発生した腎癌の現状を知るためのアンケート調査	
	研究デザイン	Evidence level 3b	
	セッティング	Division of Nephrology, Department of Internal Medicine, Kanazawa Medical University, Japan	
	対象者	日本国内 3,155 の透析施設にアンケート調査をおこない、2,133 の解答を得た。アンケート調査により新規に登録された 489 人の透析患者 (男 381 人、女 104 人、不明 4 人、平均年齢 57.5 ± 11.4 歳) に見られた腎癌。	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍別せず (3)	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)	
	対象者情報 (年齢)	年齢区別せず	
	介入 (要因曝露)	日本での 2000 年 3 月から 2002 年 2 月までの 2 年間に透析患者に発生したアンケート調査を行い腎癌の発生とその特徴を報告した。アンケート調査により得られた透析患者における腎癌の新規登録患者数をもとに、年齢と性差を標準化させて 100,000 人単位の患者数をあわせ、下記項目について一般人口と統計学的に比較検討している。	
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
	1	透析患者のうちの腎癌患者数、性差	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
2	慢性腎不全となった原疾患、透析年数、	1.主要 2.副次 3.その他 (1)	
3	年齢腎癌の組織型	1.主要 2.副次 3.その他 (1)	
4	後天性腎嚢胞の有無、遠隔転移の有無、癌死の有無	1.主要 2.副次 3.その他 (1)	
5		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
6		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
主な結果	透析患者 10 万人における年間の腎癌発生数は、透析 5 年以下の場合は 82 人、25 年以上の場合は 625 人と透析期間により段階的に増加する。日本は腎癌率が少ないことから、維持透析を行っている患者数も多く、透析期間も長く腎癌は透析患者の重要な合併症の一つである。透析年数が 20 年以上の長期患者では、10 年未満の比較的短期の患者に比較して、腎癌の発生数が高く、若年者、男性が多く、後天性のう胞腎の合併が多く、腫瘍サイズが大きく、乳頭型が多くて、診断時に遠隔転移を認めやすく、癌死患者も統計学的に有意差が認められる。		
	半数以上の腎癌患者は透析歴が 10 年以上である。透析患者に発生する腎癌は予後良好と言われているが、20 年以上の長期患者では、31.3%の患者に診断時に遠隔転移を認めており、予後不良かもしれない。		
結論	半数以上の腎癌患者は透析歴が 10 年以上である。透析患者に発生する腎癌は予後良好と言われているが、20 年以上の長期患者では、31.3%の患者に診断時に遠隔転移を認めており、予後不良かもしれない。		
備考			
レビューワーコメント	レビューワー氏名	湯浅 健	

<p>コメント</p>	<p>レビューコメント</p>	<p>腎移植がほぼ生体腎移植に限られ、件数の伸び悩む日本においては毎年およそ1万人ずつ透析患者数は増え続けており、透析技術や機器の進歩もあり今後もますます長期の透析患者は増加の一途である。それゆえに透析患者における腎癌も年々増加することがあきらかであり、しかも20年以上の長期患者では、31.3%の患者に診断時に遠隔転移を認めるなど、臨床的意味の大きい癌患者の増加が予想される。日本での透析患者における腎癌の頻度、特徴などを大規模なアンケート調査により明らかにした結果は重要である。しかしながらアンケート調査であるので central pathologist のいない本研究の病理診断は疑問がある。腎癌は VHL、c-Met、Fumarate hydratase、BHD の遺伝子異常が報告され、それぞれ淡明細胞癌、乳頭型の1型と2型、そして chromophobe と病理組織型との対応が明らかにされている癌である。腎機能障害から後天性のう胞腎の発生そして腎癌と、多段階発癌ともいふべき特徴があり、腎癌の発癌メカニズムを探る1つの良いモデルであり、病理学的診断、遺伝子学的診断をあきらかにする必要があると思う。</p>
-------------	-----------------	--

一次研究用フォーマット		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Fifteen-year follow-up of acquired renal cystic disease - A gender difference	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上での目次名称	CQ3	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタ分析 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (4)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Nephron	
	雑誌 ID		
	巻	75	
	号	3	
	ページ	315-320	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	1997		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Ishikawa I et al.	Division of Nephrology, Department of Internal Medicine, Kanazawa Medical University, Japan
	その他著者 1		
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の8項目	目的	10年から15年の長期維持透析患者の後天性腎嚢胞性疾患(acquired cystic disease of kidney: ACDK)のサイズの経過観察と性差による違い、腎癌の発生について prospective に検討する	
	研究デザイン	Evidence level 3b	
	セッティング	Division of Nephrology, Department of Internal Medicine, Kanazawa Medical University, Japan	
	対象者	1979年時点で慢性糸球体腎炎を原疾患とし、腎不全となり維持透析施行中の96例をエントリーした。腎移植施行患者が13例、死亡37例、高側腎臓4例(3例がRCC、1例が腎腺腫)、不明3例を除外した結果、最終的には15年間の維持透析を施行した38例を評価した。	
	対象者情報(国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍別別せず (3)	
	対象者情報(性別)	1.男性 2.女性 3.男女別別せず (3)	
	対象者情報(年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢別別せず (22)	
	介入(要因曝露)	ACDKのサイズの代わりに腎臓のサイズを股節CTにて毎年経過観察する。機器はSiemens, Toshiba, Yokogawaのものを使用。CT写真上で、腎嚢を除き、後天性腎嚢胞を含めた腎実質の輪郭を紙に写しとり、それをはさみで切り取って、analytical microbalance (Sartorius, Germany)でその紙の重量を測定。腎実質領域の紙の重量は、以下の方程式で計算: 体表面積 × 写した腎実質の紙の重量 ÷ 写した体表面積の紙の重量。	
	エンドポイント(アウトカム)	エンドポイント	区分
	1	腎実質領域の紙の重量を男女間、透析経過期間(10年と15年)の比較と評価	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
2		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
主な結果	透析10年、15年経過時点での腎重量はいずれにおいても男性の方が女性よりも有意に大きかった。また、透析10年、15年経過時点の腎重量を比較すると男性、女性とも15年経過時点の方が有意に腎重量が大きかった。透析10年から15年経過にかけての腎重量の増加率は男性で1.26±0.39倍、女性で1.43±0.45倍で、両者間には有意な差はなかった。男性は透析器13年を経過すると腎重量の増加が緩慢となるが、女性は透析期間が17.7年経過時点でも有意に腎重量が増大してきており、男性と比較して遅延して腎重量が増加する。透析10年と15年経過時点と比較すると、透析途中は男女とも有意差は男女差の原因は不明である。観察期間中、RCCは6症例(うち5症例は男性)に発生し、発生率は1/245人年と高率であった。		
	結論	ACDKの発症には男女差があり、男性は早期に発症し、13年を過ぎると緩慢となるのに対して、女性の透析患者は遅延してゆっくりと増大し、17.7年経過時点でも発症し続けている。後天性腎嚢胞に発生する腎癌は男性に多い。	
	備考		
レビューコメント	レビュー氏名	藤原 謙	
	レビューコメント	ACDKの発症を prospective に経過が観察され、性差による違いを求めたには評価できるが、結局15年間の経過観察が完了したのは39例であり、症例数が少なく、またACDKの大きさ、増大の仕方にも性差があることが臨床的にどのような意味があるのか、腎癌の発生と関連するのかわからない。ACDKと腎癌、特に「どうしてACDKの腎癌が男性に多いか」という説明には至ってはいず、仮説もない。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Present status of renal cell carcinoma in dialysis patients in Japan: Questionnaire study in 2002	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	CQ3	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタ分析 3.システマチック比較試験 4.非システマチック比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (4)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Nephron Clin Pract	
	雑誌 ID		
	巻	97	
	号	1	
	ページ	e11-e16	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本文語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	2004		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Ishikawa I	Division of Nephrology, Department of Internal Medicine, Kanazawa Medical University, Japan
	その他著者 1		
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
その他著者 9			
その他著者 10			

一次研究の8項目	目的	日本における透析患者に発生した腎癌の現状を知るためのアンケート調査	
	研究デザイン	Evidence level 3b	
	センディング	Division of Nephrology, Department of Internal Medicine, Kanazawa Medical University, Japan	
	対象者	日本国内 3,155 の透析施設にアンケート調査をおこない、2,133 の解答を得た。アンケート調査により新規に登録された 489 人の透析患者 (男 381 人、女 104 人、不明 4 人、平均年齢 57.5+11.4 歳) に見られた腎癌。	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国別区別せず (3)	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)	
	対象者情報 (年齢)	年齢区別せず	
	介入 (要因曝露)	日本での 2000 年 3 月から 2002 年 2 月までの 2 年間における透析患者に発生したアンケート調査を行い腎癌の発生とその特徴を報告した。アンケート調査により得られた透析患者における腎癌の新規登録患者数をもとに、年齢と性差を標準化させて 100,000 人単位の患者数をあらし、下記項目について一般人口と統計学的に比較検討している。	
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
	1	透析患者のうちの腎癌患者数、性差	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
2	慢性腎不全となった原疾患、透析年数、	1.主要 2.副次 3.その他 (1)	
3	年齢腎癌の組織型	1.主要 2.副次 3.その他 (1)	
4	後天性腎臓癌の有無、遠隔転移の有無、癌死の有無	1.主要 2.副次 3.その他 (1)	
5		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
6		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
主な結果	透析患者 10 万人における年間の腎癌発生数は、透析 5 年以下の場合は 82 人、25 年以上の場合は 625 人と透析期間により段階的に増加する。日本は腎移植が少ないことから、維持透析を行っている患者数も多く、透析期間も長く腎癌は透析患者の重要な合併症の一つである。透析年数が 20 年以上の長期患者では、10 年未満の比較的短期の患者と比較して、腎癌の発生数が高く、若年で、男性が多く、後天性のう胞腎の合併が多く、腫瘍サイズが大きく、乳頭型が多く、診断時に遠隔転移を認めやすく、癌死患者も統計学的に有意差が認められる。		
	結論	半数以上の腎癌患者は透析歴が 10 年以上である。透析患者に発生する腎癌は予後良好と言われているが、20 年以上の長期患者では、31.3%の患者に診断時に遠隔転移を認めており、予後不良かもしれない。	
	備考		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	湯浅 健	

コメント	レビューワーコメント	腎癌がほぼ生体腎移植に限られ、件数の伸び悩む日本においては毎年およそ 1 万人ずつ透析患者数は増え続けており、透析技術や機器の進歩もあり今後もますます長期の透析患者は増加の一途である。それゆえに透析患者における腎癌も年々増加することがあきらかであり、しかも 20 年以上の長期患者では、31.3%の患者に診断時に遠隔転移を認めるなど、臨床的意味の大きい癌患者の増加が予想される。日本での透析患者における腎癌の頻度、特徴などを大規模なアンケート調査により明らかにした結果は重要である。しかしながらアンケート調査であるので central pathologist のいない本研究の病理診断は疑問がある。腎癌は VHL、c-Met、Fumarate hydratase、BHD の遺伝子異常が報告され、それぞれ淡明細胞癌、乳頭型の 1 型と 2 型、そして chromophobe と病理組織との対応が明らかにされている癌である。腎機能障害から後天性のう胞腎の発生そして腎癌と、多段階発癌ともいべき特徴があり、腎癌の発癌メカニズムを探る 1 つの良いモデルであり、病理学的診断、遺伝子学的診断をあきらかにする必要があると思う。
------	------------	--

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Imaging of small renal mass: A medical success story	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	CQ4	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタアナリシス 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (4)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	AJR Am J Roentgenol	
	雑誌 ID		
	巻	175	
	号	4	
	ページ	945-955	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	2000		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Zagoria RJ	Radiology, Wake Forest Univ
	その他著者 1		
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	小計腎腫瘍の画像診断のレビュー	
	研究デザイン	Evidence level 3a	
	セッティング	Radiology, Wake Forest Univ	
	対象者	なし	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず (3)	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (22)	
	介入 (要因曝露)	なし	
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
	1		1.主要 2.副次 3.その他 ()
2		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
3		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
4		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
5		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
6		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
主な結果	なし		
結論	小径腎腫瘍診断においては、thin-collimation にて単純および三相造影 CT が最も有効である。MRI は CT と同等であるが、悪性腫瘍診断の明確なガイドラインがない。造影剤過敏がある人には有効である。イメージガイド下の生検の診断能は画像診断を上回らない。画像診断後の役割が非常に大きい。		
備考			
レビューコメント	レビューワー氏名	原林	
	レビューワーコメント		

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Small renal masses (lesions smaller than 3 cm): Imaging evaluation and management	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	CQ4	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタアナリシス 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (4)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	AJR Am J Roentgenol	
	雑誌 ID		
	巻	164	
	号	2	
	ページ	355-362	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	1995		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Curry NS	Radiology, Medical Univ. South Carolina
	その他著者 1		
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	小計腎腫瘍の画像診断のレビュー	
	研究デザイン	Evidence level 3a	
	セッティング	Radiology, Medical Univ. South Carolina	
	対象者	記載なし	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず (3)	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (22)	
	介入 (要因曝露)	記載なし	
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
	1	腎腫瘍画像診断のレビュー	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
2		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
3		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
4		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
5		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
6		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
主な結果	なし		
結論	3cm 以下の腎腫瘍を見たときは、単純、造影の thin-slice CT にて評価が有効。針生検は、転移性か原発性かを識別する以外には役立たない。MRI は発現中であるが、腎機能障害、造影剤過敏がある人以外では小径腎腫瘍診断においては中心的ではない。		
備考			
レビューコメント	レビューワー氏名	原林	
	レビューワーコメント		

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Differential diagnosis and evaluation of the incidentally discovered renal mass	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	CQ4	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタ分析 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (4)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Semin Urol Oncol	
	雑誌 ID		
	巻	13	
	号	4	
	ページ	246-253	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本文語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	1995		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Rodriguez R	Johns Hopkins Hospital, USA
	その他著者 1	Fishman EK	
	その他著者 2	Marshall FF	
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	偶然に発見された腎腫瘍の鑑別についての考察	
	研究デザイン	Evidence level 3a	
	セッティング	Johns Hopkins Hospital, USA	
	対象者	なし	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず (3)	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (22)	
	介入 (要因曝露)	なし	
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
	1	腎腫瘍	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
2	腎部分切除術	1.主要 2.副次 3.その他 (1)	
3	CT	1.主要 2.副次 3.その他 (1)	
4	超音波検査	1.主要 2.副次 3.その他 (1)	
主な結果	腎細胞癌には遺伝的要素も多くあり、結節性硬化症、フォンヒッペルリンドウ病やの過腎と腎細胞癌の間に相関を認める。偶然発見癌の中では腎細胞癌が最も多く、肉腫や転移性の腎腫瘍はまれである。尿路上皮癌も6-7%認められ、その組織型の90%は移行上皮癌である。一方、良性の腎腫瘍では解剖例の7-22%に腎癌を認めるが、通常、3cm以下と小さく、無症候的にも腎細胞癌と区別がつかないこともあるので、悪性に傾いて治療される。偶然発見癌の診断は通常、CTや超音波でつけられるが、診断が困難な例もあり、スパイラルCTを用いたガイドラインCTが、病巣の広がりや腫瘍血拴の検査には価値が低くない。診断困難症例に対しての針生検は癌細胞の種類の可能性や迅速病理の難しさを考慮すると部分切除の上で切除的治療の方が推奨される。また、微小腎腫瘍であるにもかかわらず、腎臓内での分布が不明瞭な場合は術中に超音波を併用することにより正しい評価が可能になる。		
	1950-1970年代にかけて、偶然に発見された腎腫瘍は全体の4-7%を占めるにすぎなかったのが、最近では手術症例の3分の1が偶然に発見されている。偶然に発見された腎腫瘍の大多数は、肉腫であるが、悪性腫瘍も少なからず認められる。腎細胞癌は主にCTや超音波で発見されるが、それらは腫瘍径が小さく、予後が優れている。また、微小腫瘍は部分切除でも根治性が得られるので、上記の画像診断技術の精度の向上も期待される。その為にはスパイラルCTや術中超音波検査の応用が腫瘍の評価を向上させる。		
	本論文は review でコントロールされた研究の要素はなく、ガイドラインに直接引用すべきでない。		
レビュワーコメント	レビュワー氏名	上野 宗久	
	レビュワーコメント	本論文は偶然に発見された腎細胞癌の鑑別について、複数の他論文を review したものであり、ガイドラインとして取り上げるのにふさわしくないと考える。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Renal cell carcinoma: Clinical aspects, imaging diagnosis, and staging	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	CQ5	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタ分析 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (4)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Semin Roentgenol	
	雑誌 ID		
	巻	30	
	号	2	
	ページ	128-148	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本文語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	1995		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Levine E	なし
	その他著者 1		
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	腎細胞癌の臨床的特徴、画像診断、病期診断をまとめた総説	
	研究デザイン	Evidence level 3a	
	セッティング	なし	
	対象者	なし	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず (3)	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (22)	
	介入 (要因曝露)	なし	
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
	1	CT	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
2	MRI	1.主要 2.副次 3.その他 (1)	
3	超音波検査	1.主要 2.副次 3.その他 (1)	
4	超音波検査	1.主要 2.副次 3.その他 (1)	
5		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
6		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
主な結果	CTは腎細胞癌のいろいろなタイプの典型症例(小さい腎癌、石灰化、囊腫性)の診断に有用であり、90%の感度を有するが、下大静脈血拴に関してはMRI、超音波による補助診断が有用である。リンパ節転移の診断のCT検査の感度は85%程度である。血管造影の必要性は減ったが、部分切除時の血管のマッピングに有用。治療前のリンパ節の意義については、骨痛等の症状がなければ必要ない。胸部CTは、腹部CT施行時に同時に撮影すべきである。		
	CTで偶然腎細胞癌が発見されたら、それ以上の検査は一般的に不要である。もし、肉眼的血尿等が尿路上皮の悪性疾患が疑われた場合には、排泄性尿路造影を行うべきで、その後CT等を行うべきである。MRIは造影剤が使用できない症例では有用である。また、下大静脈への腫瘍血拴の進展が疑われる場合には、MRIと超音波検査が有用であり、下大静脈造影は一般的に行わない。動脈造影の意義は少なくなり、腎部分切除では術前に行う意義がある。胸部CTは腹部CTと同時に実施し、骨シンチグラムは骨痛のある症例に限定して行うべきである。		
	本論文は review でコントロールされた研究の要素はなく、ガイドラインに直接引用すべきでない。		
レビュワーコメント	レビュワー氏名	伊藤 一人	
	レビュワーコメント	ガイドラインづくりの際に、評価されるべき項目について網羅されており、教科書的な総説。ガイドラインにおける画像診断のクリニックエグゼクティブの作成段階の参考資料としては有用である。しかし、部分切除の適応や部分切除実施時の血管造影の意義などは記載が古い。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Is there a diagnostic role for bone scanning of patients with a high pretest probability for metastatic renal cell carcinoma?	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	CQ5	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタ分析 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (4)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Cancer	
	雑誌 ID		
	巻	85	
	号	1	
	ページ	153-155	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本文語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	1999		
著者情報	筆頭著者	氏名	所属機関
		Staudenherz A et al	Clinic of Nuclear Medicine, Internal Medicine and Radiology of University Hospital Vienna, Vienna, Austria
	その他著者 1		
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の8項目	目的	腎臓の病期診断に骨シンチはルーチンに必要かどうか検証する	
	研究デザイン	Evidence level 3b	
	セッティング	Clinic of Nuclear Medicine, Internal Medicine and Radiology of University Hospital Vienna, Vienna, Austria	
	対象者	骨転移が疑われる腎臓患者 36例, 平均年齢 62才	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍別せず (3)	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女別せず (3)	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢別せず (22)	
	介入 (要因曝露)	骨転移以外の転移のある患者や痛みなどの理学所見のある患者に対し骨シンチを施行	
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
	1	骨シンチの診断的価値	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
2		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
3		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
4		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
5		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
6		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
主な結果	たとえ、他の部位の転移、痛みなどの理学所見、生化学所見の異常から骨転移が強く疑われる状況であっても、骨シンチの診断的価値は低いので、腎臓症例に対する検査から省略してもよいと考える。39%の患者に実際に骨転移が存在したわけだが、シンチの感度は7%から79%であったから。		
結論	骨転移は最終的に14例に見つかり、そのうち11例はCTやMRIでも転移が確認された。また、画像所見をもとに理学所見や生化学所見で確認されたものが3例であった。骨シンチのみで骨転移が明らかとされたのは1例のみであり、もし骨転移の診断がシンチのみで行われたのであれば、感度は7%(14分の1)、特異度100%(22分の22)、精度64%(36分の23)、もし、他のわずかな hot spotも転移とした場合には感度79%、特異度73%、精度75%となった。転移の部位と取り込みの強さの組み合わせを解析したが、転移に特異的な取り込みパターンは明らかにならなかった。血清アルカリフォスファターゼの値も、骨転移を有する群とそうでない群の間に有意差はなかった。骨シンチの所見、臨床所見、血液生化学所見のいずれも骨転移に特異的な診断パターンを明らかにできなかった。		
備考	加藤正典		
レビューコメント	他の部位に転移がなく、理学所見、生化学所見も正常な症例で骨転移を見つける頻度や精度はどのくらいなのか不明。全身MRIをルーチンに撮るのは現実的ではないので、シンチで疑われる部位を精査するほうがリーズナブルに感じる。また、症例数が少ないので、これだけで結論付けるのは少し乱暴な気がする。		

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	The diagnostic value of bone scan in patients with renal cell carcinoma	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	CQ5	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタ分析 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (4)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	J Urol	
	雑誌 ID		
	巻	166	
	号	6	
	ページ	2126-2128	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本文語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	2001		
著者情報	筆頭著者	氏名	所属機関
		Koga S et al	Departments of Urology and Radiology and Pathology, Nagasaki University School of Medicine
	その他著者 1		
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の8項目	目的	腎臓癌患者に対する骨シンチの診断的意義を評価する	
	研究デザイン	Evidence level 3b	
	セッティング	Department of Urology and Radiology and Pathology Nagasaki University School of Medicine	
	対象者	腎臓癌と診断された患者男性162例女性43例合計205例(25歳から88歳 中央値61歳)	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍別せず (3)	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女別せず (3)	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢別せず (22)	
	介入 (要因曝露)	腎臓癌患者205例すべてに対して骨シンチを740MBqの99mTcメチレンテクネシウムを使用して癌発見後2週間以内に行った。全身のシンチは注射後3~4時間後に撮影し、詳細な画像が必要な際には適宜追加した。	
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
	1	骨シンチの感度、特異度	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
2		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
主な結果	骨シンチを行った205例のうち56例に hot spot が認められた。56例のうち32例に骨転移を認め、24例が偽陽性だったわけだが、そのうち19例は骨の萎縮性変化があり、残りの5例はX線CTでも異常所見がなかった。205例のうち149例が骨シンチで異常が発見されなかったがそのうち2例がCTで骨転移ありと診断された。最終的に205例のうち本当に骨転移が存在したのは34例であった。すなわち骨シンチは94%の感度と86%の特異度を示した。骨転移のあった34例のうち骨痛を訴えた症例は12例であり、19例は局所進行、もしくは他部位の転移による症状を訴えていた。		
結論	腎臓癌患者の評価において骨シンチは骨転移の全身検索において有用であるとの結果を得た。しかしながら骨シンチで結果が正常だったからといって必ずしも骨転移がないわけではなく、さらに骨転移のない良性変化なのか最終診断するのが困難なこともある。特異度に欠けるため、X線CTなど追加の検査の必要がある。骨シンチは原発性腎臓癌において骨転移の検索に感受性の高い検査であると考えられているが、偽陽性、偽陰性となる可能性もある。骨シンチはT1~T2NOMOもしくはT3aNOMO症例で骨痛がなければ省略可能かもしれない。それらの症例において骨転移の見逃しが起こる可能性は5%未満である。腎臓癌のステージングにおいて漫然と骨シンチを行うのは薦められない。		
備考			
レビューコメント	レビューコメント		
レビューコメント	レビューコメント		
レビューコメント	小林啓男		
レビューコメント	放射線診断医2人で行った読影結果に差はなかったのか。骨痛とは具体的にどう定義するか。		

一次研究用フォーム		データ入力欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Clinical use of fluorodeoxyglucose F 18 positron emission tomography for detection of renal cell carcinoma	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	CQ5	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタ分析 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (3)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	J Urol	
	雑誌 ID		
	巻	171	
	号	5	
	ページ	1806-1809	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	2004		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Kang DE et al	
	その他著者 1		
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の8項目	目的	腎細胞癌における FDG-PET の臨床的有用性について		
	研究デザイン	Evidence level 2 b		
	セッティング	Carokinas Medical Center で加療し、1年以上の follow-up もしくは、急速進行性で1年以内に死亡した RCC 症例で consecutive cases		
	対象者	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍別せず (3)		
	対象者情報 (国籍)	1.男性 2.女性 3.男女別せず (3)		
	対象者情報 (性別)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢別せず (22)		
	対象者情報 (年齢)	原発腎腫瘍の評価 17例、転移巣および局所再発症例 49例にたいして FDG-PET 所見と CT・骨シンチなどの conventional modality による評価を比較した		
	介入 (要因曝露)	エンドポイント (アウトカム)		
	エンドポイント (アウトカム)	区分		
	1	FDG-PET	1.主要 2.副次 3.その他 (1)	
2	conventional modality	1.主要 2.副次 3.その他 (1)		
3		1.主要 2.副次 3.その他 ()		
4		1.主要 2.副次 3.その他 ()		
5		1.主要 2.副次 3.その他 ()		
6		1.主要 2.副次 3.その他 ()		
主な結果	原発腎腫瘍 (17例) では、FDG-PET および CT による (感度、特異度) はそれぞれ、(60%, 100%) vs (91.7%, 100%) であった。転移・局所再発では、後腹膜リンパ節・腎床部再発で (75%, 100%) vs (92.6%, 98%)、肺転移巣はそれぞれ (75%, 97.1%) vs (91.1%, 73.1%)、骨転移巣はそれぞれ (77.3%, 100%) vs (93.8%, 87.2%) であった。			
結論	FDG-PET はルーチンの使用には低感受性から限界があるが、conventional study で難しい評価の症例に対して高い特異度により有用性があるかもしれない			
備考				
レビューコメント	レビューワー氏名	鈴木和浩		
	レビューワーコメント	多数例の報告であり、結論も妥当な内容と考えられる。		

一次研究用フォーム		データ入力欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	The preoperative erythrocyte sedimentation rate is an independent prognostic factor in renal cell carcinoma	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	CQ6	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタ分析 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (3)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Cancer	
	雑誌 ID		
	巻	106	
	号	2	
	ページ	304-312	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	2006		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Sengupta S	Department of Urology, Mayo Clinic, Rochester, Minnesota
	その他著者 1	Lohse CM	
	その他著者 2	Cheville JC	
	その他著者 3	Leibovich BC	
	その他著者 4	Thompson RH	
	その他著者 5	Webster WS	
	その他著者 6	Frank I	
	その他著者 7	Zincke H	
	その他著者 8	Blute ML	
	その他著者 9	Kwon ED	
その他著者 10			

一次研究の8項目	目的	血沈の亢進は腎癌の予後不良因子として以前から指摘されているが、既存の予後予測モデルには含まれていない。腎癌の予後因子として血沈の有用性を検討する。		
	研究デザイン	Evidence level 2 b		
	セッティング	Department of Urology, Mayo Clinic, Rochester, Minnesota		
	対象者	この期間に単一施設 (Mayo Clinic) で sporadic 腎癌で腎摘された症例 3008 例のうち、術前に血沈を評価できた 1075 例		
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍別せず (3)		
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女別せず (3)		
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢別せず (22)		
	介入 (要因曝露)	腎摘除術 (open radical, unilateral) または腎部分切除術を施行		
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分	
	1	年齢、性、BMI	1.主要 2.副次 3.その他 (1)	
2	症状有無	1.主要 2.副次 3.その他 ()		
3	術式	1.主要 2.副次 3.その他 ()		
4	PS grade	1.主要 2.副次 3.その他 ()		
5	腫瘍血栓レベル	1.主要 2.副次 3.その他 ()		
6		1.主要 2.副次 3.その他 ()		
主な結果	1075 例中 clear cell RCC は 889 例 (82.7%) で、うち血沈亢進例は 437 例 (49.2%)、papillary RCC は 134 例 (12.5%) で血沈亢進は 41 例 (30.6%) で、clear cell との間有意差あり (p<0.01)。chromophobe RCC は 48 例 (4.5%) で血沈亢進は 41.7% で、分類不能 RCC は 4 例 (0.4%) であった。全体で 501 例 (46.6%) に血沈亢進がみられた。Clear cell RCC : 889 例血沈亢進と相関する因子は 症状有(81vs58%)、腫瘍血栓(32vs12%)、貧血(66vs12%)、白血球増多(16vs9%)、尿酸(56vs44%)、Cr 上昇(23vs14%)、高Ca(14vs9%)、高血糖(43vs35%)、Stage III vs IV (52.6vs19.7%)、Grade3vs4(63vs23.9%)、腫瘍壊死(46.7vs11.5)、Sarcomatoid 成分(10.1vs1.1%)、889 例中 646 例死亡、うち癌死 312 例、DSS5 年 71.2%、10 年 61.5%。血沈亢進群はそれ以外に比べ 4 倍近く癌死のリスクがたかかった。(RR3.60,95%CI2.82-4.59[P<0.01])この結果は病理因子別の層別解析、多変量解析に供してもなお有意であった。(RR1.92,95%CI1.16-2.00,[P<0.003]) Papillary RCC : 症状有無(39vs29%)、貧血(61vs58%)、S-Cr 上昇(37vs15%)、Stage III・IV (29vs8%)が血沈と相関。134 例中 76 例死亡しているが癌死は 15 例のみ。全体の血沈亢進の RR は 3.84, 95%CI1.38-10.63[P<0.01]。多変量解析は癌死数が少ないので行えず。Chromophobe RCC : 症状有無(50vs11%)、貧血、grade、腫瘍壊死、sarcomatoid 成分が有意に血沈と相関。48 例中 29 例死亡しているが、癌死は 6 例のみ。血沈亢進の RR10.33, 95%CI1.19-89.53[P<0.034]			
結論	血沈の亢進は、既に知られている腎癌の臨床的・病理学的諸因子とよく相関し、組織学的サブタイプにより血沈亢進例に variation があることが示された。血沈亢進はとくに clear cell RCC において腎摘施行症例の予後不良を示唆するよい指標である。			

	備考	
レビュワーコメント	レビュワー氏名	柏木 明
	レビュワーコメント	長期にわたる単一施設での膨大な症例を、後ろ向きに検討している。数が多いので説得力のある文献である。ただし症例数は3008例と多いが、評価可能（血沈を測定できている）は1075例のみであった。血沈測定群と非測定群に予後に差はなかったことを示しているが、両群の背景にバイアスがなかったかが問題になろう。今後血沈を術前ルーチン検査として前向き研究が必要であろう。

一次研究用フォーマット		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Serum acute phase reactants and prognosis in renal cell carcinoma	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	CQ6	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタアナリシス 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (3)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Cancer	
	雑誌 ID		
	巻	76	
	号	8	
	ページ	1435-1439	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	1995		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Ljungberg B	Umea University, Sweden
	その他著者 1	Grankvist K	
	その他著者 2	Rasmuson T	
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の8項目	目的	6種類の acute phase reactant (ESR, CRP, hepatoglobin, ferritin, orosomucoid, alpha1-antitrypsin) と腎癌の stage および grade との関係を比較し、さらに腎癌の予後因子としての重要度を多変量解析にて検討する。	
研究デザイン	Evidence level 2 b		
セッティング	Umea University, Sweden		
対象者	Umea 大学病院で治療され組織学的に腎癌と確認された 170 例の患者。女性：73 例、男性：97 例 平均年齢：64.7 歳 (25-86 歳) 155 例は開腹で根治的腎摘除術、3 例は部分切除術、12 例は進行癌のため姑息的な治療 (具体的な内容は不明) を受けた。リンパ節転移は腫瘍側の大血管周囲のみで、大動静脈間からは腫大あるいは palpable のリンパ節のみ切除した。		
対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず (3)		
対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)		
対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (22)		
介入 (要因曝露)	術前に血清を保存し、6 種類の acute phase reactant (ESR, CRP, hepatoglobin, ferritin, orosomucoid, alpha1-antitrypsin) を測定可能であった腎癌患者に対する根治的手術あるいは部分切除術。ただし 12 例は姑息的治療のみ。		
エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分	
1	術前の 6 因子 (ESR, CRP, hepatoglobin, ferritin, orosomucoid, alpha1-antitrypsin 値) と組織学的 Grade (Skinner の分類) および Stage (Robson 分類) との関係	1.主要 2.副次 3.その他 (1)	
2		1.主要 2.副次 3.その他 ()	

主な結果	Stage I:63例, Stage II:6例, Stage III:38例, Stage IV:63例生存している患者の平均観察期間は57.8ヵ月(3-142ヵ月)。6因子全てにおいてStage Iに比較してStage II-IIIおよびStage IVで有意に増加した。しかしStage II-IIIとStage IVの間には全ての因子で有意差を認めなかった。6因子はGradeでも同様にhigh gradeになると有意に増加した。6因子間の単相関では、相関係数0.40-0.81で全ての因子は有意に相関していた(p<0.001)。6因子についてstage Iの患者の術前値と術後6ヵ月後の値を比較すると、全ての因子で術前値が有意に高値を示した(p<0.01, ESRのみp<0.001)。6因子それぞれ単独と予後の関係では、全ての因子が有意な予後因子であった(P<0.001。ただし ferritinのみ p=0.014)。これは診断時に転移のない群(p<0.001-0.006)、ある群(p=0.005-0.028)とわけて解析しても有意であった。しかし ferritinだけは転移のない群では有意ではなかった(p=0.53)。6因子のみと予後の関係を Cox の比例ハザードモデルで step-wise に検討すると orosomuroid のみが独立した予後因子であった。しかしここに grade, stage, sex, age を加えて同様に検討すると、stage(p<0.001 95%CI: 5.109-21.585)、grade(p=0.016 95%CI: 1.239-8.158)、ESR(p=0.013 95%CI: 1.123-2.737)の3者のみが独立した予後因子であった。	
	結論	今回検討した6種類の acute phase reactant (ESR, CRP, hepatoglobin, ferritin, orosomuroid, alpha1-antitrypsin) はそれぞれが有意な予後因子であったが、多変量解析では ESR のみが独立した予後因子であった。
	備考	
レビューコメント	レビューワー氏名	永森 聡
	レビューワーコメント	170例中既に遠隔転移を認めるものが63例(37%)もあり、解析する対象としては我が国に比べるとやや転移の割合が多い印象である。6因子間の単相関は予想通り明らかに強く(全て p<0.001)。この因子を全て投入した多変量解析の結果は正しくなく、従ってこの論文の様に grade, stage, sex, age を加えて step-wise に解析し、最終的には6因子のうちでは ESR のみが独立した予後因子であるという結論は信用できる。

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	The relationship between the preoperative systemic inflammatory response and cause-specific survival in patients undergoing potentially curative resection for renal clear cell cancer.	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	CQ6	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタアナリシス 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (3)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Br J Cancer	
	雑誌 ID		
	巻	94	
	号	6	
	ページ	781-784.	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.看護 3.看護 4.その他 (1)	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)	
	発行年月	2006	
著者情報	氏名		
	所属機関		
	筆頭著者	Lamb GW	Department of Urology, Gartnavel General Hospital and University Department of Surgery, Royal Infirmary, Glasgow, UK
	その他著者 1	McMillan DC	
	その他著者 2	Ramsey S	
	その他著者 3	Aitchison	
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
その他著者 9			
その他著者 10			

目的	術前の全身炎症反応 (CRP) が、治癒切除としての腎摘出術において癌特異生存率の予後因子足りうるかを評価する		
研究デザイン	Evidence level 2 b		
セッティング	Department of Urology, Gartnavel General Hospital and University Department of Surgery, Royal Infirmary, Glasgow, UK		
対象者	Potentially curative resectionを受けた腎臓明細胞癌患者 100例		
対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず (3)		
対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)		
対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (22)		
介入 (要因曝露)	1996-2000 までは retrospective に症例を収集し、2001 年以降は prospective に症例を収集している		
エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分	
一次研究の8項目	1	性別、病期分類	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
	2	細胞異型度	1.主要 2.副次 3.その他 ()
	3	PS, combined score(UISS)	1.主要 2.副次 3.その他 ()
	4	全身炎症反応 (CRP)	1.主要 2.副次 3.その他 ()
	5		1.主要 2.副次 3.その他 ()
	6		1.主要 2.副次 3.その他 ()
主な結果	最低観察期間 12ヶ月 (中央値 59ヶ月) の観察期間において 25名が死亡した。このうち 18名が癌死で7名が併発症で死亡した。単変量解析においては性別 (p=0.050) 細胞異型度 (p<0.001) 病期分類 (p<0.001) UISS(p<0.001) CRP(p<0.01)が重要な予後因子であった。性別、病期分類、細胞異型度、PS、CRPによる多変量解析では性別 (Hazard ratio:0.25, 95%CI:0.06-0.99,p=0.048) 細胞異型度 (Hazard ratio:2.91, 95%CI:0.29-6.56,p=0.010) CRP(Hazard ratio:7.67, 95%CI:1.64-35.84,p=0.010)が重要な予後因子であった。性別、UISS、CRPによる多変量解析ではUISS (Hazard ratio:2.70, 95%CI:1.00-7.30,p=0.050)、CRP (Hazard ratio:4.00, 95%CI: 1.21-13.31,p=0.024) が重要な予後因子であった。また CRP 上昇症例(10mg/l 以上)においては病期分類、細胞異型度が進んだ症例、PSの悪い症例、UISSが高い症例が認められる傾向があった。また CRPを 10mg/l 以上と以下の群で分けたとそれぞれ癌特異的生存率はそれぞれ 71ヶ月と 96ヶ月で有意差 (p<0.001) を認めた。また UISSで low または intermediate とリスクが分類された群でかつ CRP 高値(10mg/l 以上)の症例は癌特異生存率の低下が認められた。		
結論	CRPの上昇(10mg/l 以上)は腎臓明細胞癌における治癒切除症例の癌特異的生存率が低くなる予後因子である。		
備考			
レビューワー氏名	中島耕一		
レビューワーコメント	組織型との比較はなされていない。T3,T4 症例の手術は治癒切除といえるのか、CRP を 10mg/l で分けることの妥当性を議論しているが、他の数値で議論されている論文も存在している。		

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Metastatic renal carcinoma comprehensive prognostic system	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	CQ6	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタアナリシス 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (3)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Br J Cancer	
	雑誌 ID		
	巻	88	
	号	3	
	ページ	348-353	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本文語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	2003		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Atzpodien J	Medizinische Hochschule Hannover, Germany, Fachklinik Homheide an der Universität Munster,Germany, Europaisches Institut für Tumor Immunologie und Pravenion,Germany
	その他著者 1	Royston P	
	その他著者 2	Wandert T	
	その他著者 3	Reitz M	
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	全身免疫化学療法を受けた転移性腎細胞癌患者の包括的な予後予測システムを作るために、全身治療前の臨床的パラメーターと予後との関連を検討した。	
	研究デザイン	Evidence level 2b	
	セッティング	Medizinische Hochschule Hannover,Germany, Fachklinik Homheide an der Universität Munster,Germany, Europaisches Institut für Tumor Immunologie und Pravenion,Germany	
	対象者	転移性腎細胞癌の患者で、IFN-α 2a 及び IL-2 の投与、あるいはこれらに加えて 5-FU、13cRA の投与を受けた 425 人。男 114 人、女 311 人。血球減少・高ビリルビン血症・心臓・中枢神経系合併症などを持たない患者。	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍別せず (3)	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女別せず (3)	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢別せず (22)	
	介入 (要因曝露)	IFN-α 2a 及び IL-2 の投与、あるいはこれらに加えて 5-FU、13cRA の投与を行った	
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
	1	転移部位(肺・リンパ節・脳・骨・その他)	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
2	転移巣の数、血沈、ヘモグロビン	1.主要 2.副次 3.その他 (1)	
3	好中球数、LDH、CRP	1.主要 2.副次 3.その他 (1)	
主な結果	単変量解析では、(1)転移数 3 個以上(p<0.001) (2)肺・リンパ節・骨転移の存在(p=0.03、0.02、<0.001) (3)好中球数≥6500(p<0.001) (4)LDH≥220(p<0.001) (5)CRP≥11(p<0.001) が有意な予後因子であった。このうち、多変量解析では好中球数のみが有意な独立予後因子であった(Cox 比例ハザードモデル;hazard 比<1.5、p<0.001)。これらを用いて、好中球数を major factor(risk score2)、CRP/LDH/転移巣の数/腎転移の存在/原発巣診断から転移出現までの期間、をそれぞれ minor factor(risk score1)として、risk score の総和による risk group 分類を試みた。各群の median overall survival は low risk 群(score0~1)が 32 ヶ月(95%CI24.43:5 年生存 27%)、intermediate risk 群(score2~3)18 ヶ月(CI15.20:5 年生存 11%)、high risk 群(score4~7)8 ヶ月(CI6.10:5 年生存 5%)であった。		
	本検討の予後分類は、個々の患者の治療だけでなく、患者の prospective な臨床試験への登録についての検討に対しても有用である。		
	備考		
レビューコメント	レビューワー氏名	望月端吾	
	レビューワーコメント	患者を全身免疫化学療法の内訳で群分けしているが、それが比較検討されていない。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Immunosuppressive acidic protein detects high nuclear grade localized renal cell carcinoma	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	CQ6	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタアナリシス 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (7)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Urology	
	雑誌 ID		
	巻	66	
	号	4	
	ページ	736-740	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本文語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	2005		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Kawata N	日本大学医学部泌尿器科、東京
	その他著者 1	Yamaguchi K	
	その他著者 2	Hirakata H	
	その他著者 3	Hachiya T	
	その他著者 4	Yoshida T	
	その他著者 5	Takimoto Y	
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	腎臓における高異型度細胞の存在の術前予測因子を同定する	
	研究デザイン	Evidence level 4	
	セッティング	日本大学医学部泌尿器科、東京	
	対象者	根治的腎摘出術を行った組織学的に腎細胞癌と診断された 181 例 (平均年齢: 57.94 歳、男 136 例、女 45 例)	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍別せず (3)	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女別せず (3)	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢別せず (22)	
	介入 (要因曝露)	病期診断は TNM 分類、異型度診断は Fuhrman 分類を用いた。手術後の観察は 1-142 ヶ月、中央値は 32 ヶ月であった。	
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
	1	hemoglobin, CRP, ALP	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
2	ferritin, IAP, 腫瘍の最大径、細胞異型度	1.主要 2.副次 3.その他 (1)	
3		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
主な結果	患者背景: 細胞異型度分類は G1: 74 例 (41%), G2: 75 例 (41%), G3+G4: 32 例 (18%) 病期分類は T1a64 例 (35%), T1b49 例(27%), T235 例 (19%), T3 19 例 (11%), T414 例 (8%) であった。腫瘍径 40mm 以上、hemoglobin12g/dl (女性) 14g/dl (男性)、CRP0.3mg/ml, ALP355U/L, ferritin120mg/ml (女性)、280ng/ml (男性)、IAP500 μg/ml を閾値として G3+G4 症例 (32 例) と T1 症例 (T1a+T1b:113 例) でそれぞれを検討したところ CRP と IAP が高値のものは正常と比べて odds 比で 2.5 倍 (p value<0.001)、4 倍と (p value<0.0001) なり、T1 症例においても IAP 高値のものは正常と比べて約 10 倍 (p value:0.002) となった。		
	CRP と IAP は術前に高異型度細胞を含む予後因子として有用、また T1 症例においては IAP が特に有用であることが示唆された。		
	備考		
レビューコメント	レビューワー氏名	中島耕一	
	レビューワーコメント	T1 症例における G3,G4 の占める割合 (38%) が、全体での割合 (18%) と比して均等でないのではないか、組織型との検討がなされていない。CRP を 0.3mg/dl で分ける意義が議論されていない	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Long-term survival analysis after laparoscopic radical nephrectomy	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	CQ7	
書籍情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタ分析 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (4)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	J Urol	
	雑誌 ID		
	巻	174	
	号	4 Pt 1	
	ページ	1222-1225	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	2005		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Permpongkosol S et al	Johns Hopkins Univ. Dept. of Urology
	その他著者 1		
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

目的	臨床的に限局性腎細胞癌に対して腹腔鏡下腎摘除術を施行した症例の癌の長期成績について、開腹腎摘除術と比較検討した。		
研究デザイン	Evidence level 3a		
セッティング	Johns Hopkins Univ. Dept. of Urol.		
対象者	1991年から1999年までに根治的腎摘除術を施行された121例(腹腔鏡下手術, 開腹手術を含む)		
対象者情報(国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず (3)		
対象者情報(性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)		
対象者情報(年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (22)		
介入(要因曝露)			
エンドポイント(アウトカム)	エンドポイント	区分	
一次研究の8項目	1	Disease-free survival	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
	2	Cancer specific survival	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
	3	Actuarial survival	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
	4		1.主要 2.副次 3.その他 ()
主な結果	臨床病期 T1/2N0M0 の症例における長期成績では、腹腔鏡下腎摘除術は開腹腎摘除術とは癌のコントロールという意味では、差を認めなかった。		
結論	観察期間は腹腔鏡下手術 73 ヶ月、開腹手術は 80 ヶ月。腹腔鏡下手術を施行された 67 例中 53 例は再発なく生存、2 例が転移を有し、2 例が 12 ヶ月 17 ヶ月で転移再発を来し死亡した。10 例は原病と関係なく死亡した。開腹手術の 54 例中、34 例は再発なく生存、1 例が転移を有し、6 例が転移再発を来し死亡した。13 例は原病と関係なく死亡した。5 Y ならびに 10 Y Cancer specific survival は 97% であり、開腹手術の 89%、86% より高い傾向にあったが、有意差は認めなかった。5 年、10 年での比較では、Cancer specific survival は術式により影響を受けなかった。		
備考			
レビューコメント	レビューワー氏名	宮嶋 哲	
	レビューワーコメント	腫瘍径に関する変数が含まれていない。どの施設の検討でも patinet selection の段階で bias がかかっている。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Long-term outcome of hand-assisted laparoscopic radical nephrectomy for localized stage T1/T2 renal-cell carcinoma	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	CQ7	
書籍情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタ分析 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (4)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	J Endrol	
	雑誌 ID		
	巻	19	
	号	7	
	ページ	803-807	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	2005		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Harano M et al	九州大学
	その他著者 1		
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

目的	T1-T2 腎細胞癌に対するハンドアシスト腹腔鏡下根治的腎摘除術の長期成績の検討		
研究デザイン	Evidence level 3b		
セッティング	九州大学		
対象者	T1-T2N0M0 の腎細胞癌患者 96 例		
対象者情報(国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず (3)		
対象者情報(性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)		
対象者情報(年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (22)		
介入(要因曝露)	限局性腎細胞癌に対する腹腔鏡下根治的腎摘除術		
エンドポイント(アウトカム)	エンドポイント	区分	
一次研究の8項目	1	手術時間	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
	2	出血量	1.主要 2.副次 3.その他 ()
	3	術後経過	1.主要 2.副次 3.その他 ()
	4	開腹手術への移行率	1.主要 2.副次 3.その他 ()
	5		1.主要 2.副次 3.その他 ()
	6		1.主要 2.副次 3.その他 ()
主な結果	平均年齢：61.1 歳、平均腫瘍径：4.3cm、平均手術時間：246 分、平均出血量：251ml、術後経口摂取開始期間：1.7 日、術後歩行開始期間：1.7 日、術後在院日数：11.4 日、開腹手術への移行例：3 例、合併症率：10.4%であった。開腹手術 86 例と比較した場合、平均手術時間・平均出血量・術後経口摂取開始期間・術後歩行開始期間・術後在院日数において有意差を認めない。疾患特異的生存率は、有意差を認めなかった。		
結論	ハンドアシスト腹腔鏡下根治的腎摘除術は T1-T2 腎細胞癌に対し安全で有用な方法であり、長期腫瘍コントロールに関しても開腹手術と差を認めない。		
備考			
レビューコメント	レビューワー氏名	藤田 哲夫	
	レビューワーコメント	ハンドアシストと通常の腹腔鏡下根治的腎摘除術との比較が必要であると考えられた。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Laparoscopic radical nephrectomy: Cancer control for renal cell carcinoma	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	CQ7	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタ分析 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (4)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	J Urol	
	雑誌 ID		
	巻	166	
	号	6	
	ページ	2095-2099; discussion 9-100	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	2001		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Chan DY et al	The James Buchanan Brady Urology Institute, The Johns Hopkins Medical Institution
	その他著者 1		
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	限局性腎癌に対する腹腔鏡下および開放根拠的腎摘術の成績を検討した。	
	研究デザイン	Evidence level 3 b	
	セッティング	The James Buchanan Brady Urology Institute, The Johns Hopkins Medical Institution	
	対象者	臨床病期 T1/2, NX, MX の腹腔鏡下根拠的腎摘を受けた 67 人と対照の開放根拠的腎摘術の 54 人	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず (3)	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (22)	
	介入 (要因隠蔽)	術式は医師と患者の好みにより決定。臨床記録と手術記録を後ろ向きに調査	
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
	1	手術時の年齢、臨床病期	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
2	腫瘍の大きさ、手術時間、出血量	1.主要 2.副次 3.その他 (1)	
3	在院期間、周術期の合併症、観察期間、病気の有無、再発までの期間	1.主要 2.副次 3.その他 (1)	
4	生存率	1.主要 2.副次 3.その他 (1)	
5		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
6		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
主な結果	限局性腎癌に対する腹腔鏡下根拠的腎摘術は、癌の根治性が保たれれば効果的な治療法である。この検討では開放手術と比較して在院期間が短く、生存期間は差が見られなかった。		
結論	手術時間は腹腔鏡群で有意に長く、在院期間は有意に短かった。全ての患者が最低 12 ヶ月の観察期間を持っていた。腹腔鏡群では平均観察期間 35.6 ヶ月で 2 例が癌死した。開放手術群では平均観察期間 44 ヶ月で 2 例の癌死と 3 例の病状進行が見られた。癌なし生存率と実生存率の Kaplan-Meier による検討では統計学的な差は見られなかった。また合併症の率も違いは認められなかった。		
備考			
レビュワーコメント	レビュワー氏名	大東貴志	
	レビュワーコメント	この研究は限局性腎癌に対する腹腔鏡下手術と開放手術の非無作為後ろ向き研究であるが、RCT は事実上不可能であるため有益な検討だと思われる。観察期間はまだ十分とは言えない。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Indications and contraindications for the use of laparoscopic surgery for renal cell carcinoma	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	CQ7	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタ分析 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (4)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Nat Clin Pract Urol	
	雑誌 ID		
	巻	3	
	号	1	
	ページ	32-37	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	2006		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Albqami N et al	Dept of Urol. eisabethinen Hospital, Linz, Austria
	その他著者 1		
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	腹腔鏡下腎摘術ならびに腎部分切除術に関する現在の手術適応、不適応についてシステマティックレビューを行った。	
	研究デザイン	Evidence level 3 a	
	セッティング	Dept of Urol. eisabethinen Hospital, Linz, Austria	
	対象者	上記研究期間に publish された論文で "renal cell carcinoma", "radical nephrectomy", "laparoscopy", "partial nephrectomy" の単語を含むもの。	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず (3)	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (22)	
	介入 (要因隠蔽)		
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
	1	周術期の合併症	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
2	癌のコントロール	1.主要 2.副次 3.その他 (1)	
3		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
4		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
5		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
6		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
主な結果	腎癌に対する LRN は多くの施設において標準術式になりつつある。臨床病期 T1-T2 の腫瘍は全て、LRN の適応と考えていいようである。多くの施設で腫瘍径 4 cm 未満の腎腫瘍に対しては腎部分切除術が一般的である。現在、限局性腎癌で腫瘍径 7 cm 以下であれば、腎部分切除術であると適応拡大されつつある。腹腔鏡下腎部分切除術 (LPN) も腫瘍径の小さな腎腫瘍に適応されつつあり、必要とされる手技であり、この手技の習得ならびに発展が腎部分切除術の適応である全ての症例が LPN によって処置されることを可能にすると考えられた。		
結論	腹腔鏡下腎摘術 (LRN) は術後の低侵襲性、鎮痛剤の減少、入院期間の減少という点で開放手術より優れている。手術時間についても以前ほど問題視されなくなっている。腹腔鏡下腎部分切除術 (LPN) については、持続的に手技は進歩し、腎部分切除術の適応である患者全てがこの手技の適応になる可能性はあるものの、未だ確立された手技ではない。		
備考			
レビュワーコメント	レビュワー氏名	宮嶋 哲	
	レビュワーコメント	LPN における冷阻血の方法、手技については今だに議論の余地があるところであり、腎機能は生存という観点からの長期成績を待ちたい。なおかつ、どれくらいの施設で本術式が可能であり、合併症の状況について知りたところである。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Laparoscopic and partial nephrectomy	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドラインでの目次名称	CQ7	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタ分析 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (4)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Clin Cancer Res	
	雑誌 ID		
	巻	10	
	号	18Pt	
	ページ	6322S-6327S	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本文語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	2004		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Novic AC et al	Glickman Urological Institute, Cleveland Clinic Foundation and Cleveland Clinic Lerner College of Medicine of Case Western Reserve University, Cleveland Ohio
	その他著者 1		
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

目的	小径腎癌に対する腹腔鏡下腎温存手術 (NSS) の妥当性について、開腹術による腎部分切除術と比較検討する。		
研究デザイン	Evidence level 2a		
セッティング	Glickman Urological Institute, Cleveland Clinic Foundation and Cleveland Clinic Lerner College of Medicine of Case Western Reserve University, Cleveland Ohio		
対象者	Cleveland Clinic にて、径 7cm 以下の腎癌と診断された 100 例。比較対象は、開腹術にて腎部分切除を行った 100 例。		
対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず (3)		
対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)		
対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (22)		
介入 (要因曝露)	小径腎癌に対する腹腔鏡下腎部分切除術		
エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分	
一次研究の 8 項目	1	腫瘍径	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
	2	手術時間、出血量、阻血時間	1.主要 2.副次 3.その他 ()
	3	surgical margin、鎮痛薬使用量	1.主要 2.副次 3.その他 ()
	4	入院期間、手術前後の Cr	1.主要 2.副次 3.その他 ()
	5	術中・術後合併症	1.主要 2.副次 3.その他 ()
主な結果	腫瘍径は、開腹術で有意に大きかった。手術時間は開腹術で 3.9h r/ラパロで 3.0hr であったが有意差はなかった。しかし、出血量は開腹術で 250ml に対しラパロで 125ml と有意に少なかった。阻血時間は開腹術で 17.5 分に対しラパロで 27.8 分と有意に長かった。モルヒネの使用量についても、開腹術群で 252mg であったのに対し、ラパロで 20mg と有意に少なかった。入院期間も開腹術で 5 日に対し、ラパロで 2 日と有意に短かった。手術前後の Cr の値については、両術式で有意差はなかった。Surgical margin 陽性の患者は、開腹術で見られなかったが、ラパロで 3% に認められた。術中合併症については、両術式で有意差はなかった。開腹術症例では認めなかった。術後合併症について、開腹術では 29% に認められたが、ラパロでは 11% に認められた。合併症についてはラパロ症例で頻度は多いが、有意なものではなかった。		
結論	小径腎癌に対する開腹による腎部分切除術は、確立された術式である。腹腔鏡下腎部分切除術については、阻血時間が長い、合併症が多いという問題が存在する。また、surgical margin も、より多くする必要がある。しかしながら、出血量やモルヒネの使用量、入院期間については開腹術よりメリットがあり、腎機能についても開腹術と同様に温存されるので、今後も cooling や阻血時間を短くする技術改良を検討する必要がある。		
備考			
レビューワー氏名	原野正彦 (江藤正俊)		
レビューワーコメント	単一施設での検討。統計学的有意差はないものの、合併症については明らかに開腹術より多い。Oncological outcome についても surgical margin positive が 3 例に見られたのは問題ではないだろうか。		

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	The evolving role of partial nephrectomy in the management of renal cell carcinoma	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドラインでの目次名称	CQ8	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタ分析 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (3)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Curr Oncol Rep	
	雑誌 ID		
	巻	5	
	号	3	
	ページ	239-244	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本文語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	2003		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Girbert SM. et al	Dept of Urology, Columbia-Presbyterian Medical Center
	その他著者 1		
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

目的	腎部分切除に関するレビュー論文である		
研究デザイン	Evidence level 2a		
セッティング	Department of Urology, Columbia-Presbyterian Medical Center		
対象者			
対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず (3)		
対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)		
対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (22)		
介入 (要因曝露)			
エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分	
一次研究の 8 項目	1	腎部分切除術の適応	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
	2	結果、問題点 (合併症、腫瘍残存)	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
	3		1.主要 2.副次 3.その他 ()
	4		1.主要 2.副次 3.その他 ()
	5		1.主要 2.副次 3.その他 ()
	6		1.主要 2.副次 3.その他 ()
主な結果	腎部分切除は単腎や腎機能の低下した患者では絶対的適応となる。腫瘍サイズが小さい例、特に 4cm 以下の場合再発率が低く根治的腎摘出術と遜色ない結果が得られる。癌特異的生存率は腫瘍のステージや症状の有無、両側腎、腫瘍サイズに影響される。主な合併症としては、虚血による腎不全、切除部からの出血、尿管があげられる。局所再発は、不十分な腫瘍切除あるいは多中心性の発生が原因として考えられる。腫瘍切除は 1cm の margin をとることが薦められていたが、これには根拠がなく摘出標本で margin negative であれば予後はよい。単腎例は当然のこととして、対側腎が正常であっても腎機能の予後に関しては根治的腎摘に比較して、腎部分切除の方がよい。最近増加してきた内視鏡的腎部分切除は切開創が小さく入院も短期で良いというメリットがあるが、手技が難しく習得にも時間がかかる。		
結論	腎臓癌に対する部分切除は、根治的腎摘と比較し cancer control に関して同等であり、腎機能保持の面では優れた成績を示し、4cm 以下の腎臓癌では標準的な術式である。内視鏡的部分切除は技術的発展は著しいが長期成績は出ていない。		
備考			
レビューワー氏名	近田龍一郎		
レビューワーコメント			

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	The indications for partial nephrectomy in the treatment of renal cell carcinoma	
	論文の日本語タイトル		
診療科・イテラティブ情報	イテラティブでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	イテラティブ上の目次名称	CQS	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタアナリシス 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (3)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Nat Clin Pract Urol	
	雑誌 ID		
	巻	3	
	号	4	
	ページ	198-205	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)	
	発行年月	2006	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Joniau S et al	The Department of Urology, University Hospital Gasthuisberg, Leuven, Belgium
	その他著者 1		
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	NSSの適応、禁忌、利点、欠点について焦点をあて、各論文をレビューする。	
	研究デザイン	Evidence level 2a	
	セッティング	The Department of Urology, University Hospital Gasthuisberg, Leuven, Belgium	
	対象者	上記論文内の患者	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず (3)	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (22)	
	介入 (要因曝露)		
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
	1	5年無病率	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
	2	局所再発率	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
	3	観察期間	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
4		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
5		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
6		1.主要 2.副次 3.その他 ()	
主な結果			
結論	NSSのもっとも大きな利点は腎機能の温存である。対側腎の再発と良性腫瘍であったときに不必要な全摘をしてしまう可能性があるがNSSの利点をさらに強調している。手術を行うときには発見することができない腎腫瘍の多発性により局所再発をすることがあるが、これはいまだに大きな欠点である。外科的マージンをどのように決定するかについてはコンセンサスがないが、ネガティブマージンを達成しなければならない。経験豊富な施設では術後のトラブルはほとんどないので、患者のベネフィットは大きい。		
備考	レビューである。		
レビュワーコメント	レビュワー氏名	三木健太	
	レビュワーコメント		

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Laparoscopic and partial nephrectomy	
	論文の日本語タイトル		
診療科・イテラティブ情報	イテラティブでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	イテラティブ上の目次名称	CQS	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタアナリシス 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (4)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Clin Cancer Res	
	雑誌 ID		
	巻	10	
	号	18Pt 2	
	ページ	6322S-6327S	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)	
	発行年月	2004	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Novic AC et al	Glickman Urological Institute, Cleveland Clinic Foundation; and Cleveland Clinic Lerner College of Medicine of Case Western Reserve University, Cleveland Ohio
	その他著者 1		
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	散発性の局所腎細胞癌におけるネフロン温存手術患者の長期予後と温存腎機能、さらに癌特異生存率においてレビューし検討した。	
	研究デザイン	Evidence level 3a	
	セッティング	Glickman Urological Institute, Cleveland Clinic Foundation; and Cleveland Clinic Lerner College of Medicine of Case Western Reserve University, Cleveland Ohio	
	対象者	一施設において局所腎細胞癌に対し腎部分切除を施行した107例(年齢、性別不明)をレトロスペクティブに検討。	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず (3)	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (22)	
	介入 (要因曝露)	腎部分切除を施行した散発性局所腎細胞癌患者	
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
	1	長期腎機能温存	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
	2	10年癌特異生存率	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
	3		1.主要 2.副次 3.その他 ()
主な結果	長期腎機能温存は93%の患者において、また10年癌特異生存率は73%の患者において達成された。		
結論	腎細胞癌に対するネフロン温存手術は根治的腎摘除術に匹敵する長期の癌なし生存率を達成した。鏡視下腎部分切除術は、選択された症例において効果的な低侵襲手術であることが証明されつつあるが、腎腫瘍時間が長い傾向があり開腹手術に比して合併症率がやや高い。腎の効果的な冷却や温阻血時間の短縮が鏡視下手術には求められる。		
備考			
レビュワーコメント	レビュワー氏名	工藤大輔	
	レビュワーコメント	筆者が講演で発表したもののレビューであり、論文を元に手術方法やテクニックについて概説されている。新たなデータとして述べられているのは10年以上フォローされた107例についての結果であるが、手術方法や腫瘍サイズ、性別などまったく明らかにされていない。レビューということもあり、エビデンスレベルとしては低く設定せざるを得ない。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Radical nephrectomy plus interferon-alfa-based immunotherapy compared with interferon alfa alone in metastatic renal-cell carcinoma: A randomised trial	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	CQ9	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタ分析 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (2)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Lancet	
	雑誌 ID		
	巻	358	
	号	9286	
	ページ	966-970	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	2001		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Mickisch GH et al	EORTC Genitourinary Group
	その他著者 1		
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

目的	転移を有する進行性腎癌に対するインターフェロンα併用腎摘除術とインターフェロン単独療法との無作為試験		
研究デザイン	Evidence level 2 b		
セッティング	EORTC Genitourinary Group		
対象者	転移を有する 85 例の進行性腎癌患者 (PS は 0 か 1、所属リンパ節以上の転移を有する、通常の腎摘除術では摘除できない測定可能病変を有する、腎原発巣は摘出できる病変) を無作為均等に腎摘出+インターフェロン群 (42 例) とインターフェロン単独群 (43 例) に割付、年齢、性差、原発巣、転移巣の背景に有意差はなし。		
対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず (3)		
対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)		
対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (22)		
介入 (要因曝露)	転移を有する進行性腎癌患者に対して、腎摘+インターフェロン群では、腎摘及びその1ヶ月後より、週 500 万単位を3回、52 週継続。インターフェロン群は、後者のインターフェロン投与のみ。		
エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分	
一次研究の 8 項目	1	診断時年齢、性差、PS、原発巣	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
	2	転移巣の評価	1.主要 2.副次 3.その他 ()
	3	手術合併症	1.主要 2.副次 3.その他 ()
	4	インターフェロンの副作用、奏効率	1.主要 2.副次 3.その他 ()
	5	time to progression, overall survival	1.主要 2.副次 3.その他 ()
	6		1.主要 2.副次 3.その他 ()
主な結果	手術+インターフェロン群に割り付けられた 42 名とインターフェロン群に割り付けられた 42 名の間には、年齢、性差、原発の T stage、静脈浸潤、転移の程度に有意差は認めなかった。前者は、13 例が除外症例、後者は 3 例が除外症例となった。両群ともにインターフェロンの副作用は同程度にみられ、容重の変更を余儀なくされた。奏効率に関しては、CR+PR で、前者は 19%、後者は 12%と有意差はなかった。しかし、time to progression と overall survival は、前者が後者より有意に延長していた。survival の中央値は、後者が 7 ヶ月であったに対して、前者は 17 ヶ月と有意に改善していた。		
	転移を有する進行性腎癌患者では、PS がよく、局所が外科的に切除可能な場合は、局所の外科的切除後に免疫治療を行ったほうが、単に免疫治療を行った場合より、有意に予後を改善する。		
結論	転移を有する進行性腎癌患者では、PS がよく、局所が外科的に切除可能な場合は、局所の外科的切除後に免疫治療を行ったほうが、単に免疫治療を行った場合より、有意に予後を改善する。		
備考			
レビュワーコメント	レビュワー氏名	増田 均	
	レビュワーコメント	免疫治療の検討なので、検討項目の中に、CRP や Hb など、全身的なパラメーターもいれて検討すべきである。今後、より大規模な RCT が必要である	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Nephrectomy followed by interferon alfa-2b compared with interferon alfa-2b alone for metastatic renal-cell cancer	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	CQ9	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタ分析 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (1)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	N Engl J Med	
	雑誌 ID		
	巻	345	
	号	23	
	ページ	1655-1659	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	2001		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Flanigan RC et al	Southwest Oncology Group (SWOG)
	その他著者 1		
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

目的	転移性腎癌患者に対する interferon alpha-2b 療法の治療効果は腎摘除術により改善するか?		
研究デザイン	Evidence level 1 b		
セッティング	Southwest Oncology Group (SWOG)		
対象者	転移性腎癌患者		
対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず (3)		
対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)		
対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (22)		
介入 (要因曝露)	原発巣の腎摘除術 Interferon alpha-2b 皮下注射:導入、day1 1.25 million IU/m2、day2 2.5、day3 3.75、day4 5 million IU/m2; 維持、5 million IU/m2 x3/week で増悪を認めるまで。		
エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分	
一次研究の 8 項目	1	Interferon alpha-2b 単独治療群 (n=121) と腎摘+interferon alpha-2b 群(n=120) の median survival	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
	2		1.主要 2.副次 3.その他 ()
	3		1.主要 2.副次 3.その他 ()
	4		1.主要 2.副次 3.その他 ()
	5		1.主要 2.副次 3.その他 ()
	6		1.主要 2.副次 3.その他 ()
主な結果	腎摘併用は、計測可能病変の有無、performance status (0 or 1)、転移臓器 (肺のみ or その他) の因子とは独立した予後規定因子であった。		
	転移性腎癌患者に対する腎摘併用 interferon alpha-2b 療法は、interferon alpha-2b 療法単独と比較して有意に良好な予後を示した。		
結論	転移性腎癌患者に対する腎摘併用 interferon alpha-2b 療法は、interferon alpha-2b 療法単独と比較して有意に良好な予後を示した。		
備考			
レビュワーコメント	レビュワー氏名	古賀文隆	
	レビュワーコメント	Prospective randomized study により、転移性腎癌患者に対する interferon alpha-2b 療法の治療効果が cytoreductive nephrectomy により改善することを実証した論文。日常臨床における decision making に与える影響は大きい。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Cytoreductive nephrectomy in patients with metastatic renal cancer: A combined analysis	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	CQ9	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタ分析 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (1)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	J Urol	
	雑誌 ID		
	巻	171	
	号	3	
	ページ	1071-1076	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	2004		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Flanigan RC et al	
	その他著者 1		
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の8項目	目的	有転移腎癌に対する腎摘施行の研究論文で retrospective study 7 編と RCT 2編をまとめた review paper である。	
	研究デザイン	Evidence level 1a	
	セッティング		
	対象者	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず (3)	
	対象者情報 (国籍)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)	
	対象者情報 (性別)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (22)	
	対象者情報 (年齢)		
	介入 (要因曝露)		
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
	1		1.主要 2.副次 3.その他 ()
	2		1.主要 2.副次 3.その他 ()
	3		1.主要 2.副次 3.その他 ()
	4		1.主要 2.副次 3.その他 ()
	5		1.主要 2.副次 3.その他 ()
	6		1.主要 2.副次 3.その他 ()
主な結果			
結論			
備考			
レビュワーコメント	レビュワー氏名	大園誠一郎	
	レビュワーコメント	各論文 (とくに RCT) はすでに採用されており、本論文は診療ガイドラインの検討に採用すべきでない論文と考えられる。	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Scoring algorithm to predict survival after nephrectomy and immunotherapy in patients with metastatic renal cell carcinoma: A stratification tool for prospective clinical trials	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	CQ9	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタ分析 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (4)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Cancer	
	雑誌 ID		
	巻	98	
	号	12	
	ページ	2566-2575	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	2003		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Leibovich BC et al	UCLA Kidney Cancer Registry
	その他著者 1		
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の8項目	目的	有転移腎癌に対する腎摘および免疫療法法の retrospective 研究より予後予測のアルゴリズムの作成	
	研究デザイン	Evidence level 3b	
	セッティング	UCLA Kidney Cancer Registry	
	対象者	173 例の有転移腎癌症例。平均年齢 56.4 歳、男性 134 例 (77.5%)。	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず (3)	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (22)	
	介入 (要因曝露)	有転移腎癌に対する手術療法	
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
	1	disease-specific survival (臨床的、手術的、病理学的パラメータ)	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
	2		1.主要 2.副次 3.その他 ()
	3		1.主要 2.副次 3.その他 ()
	4		1.主要 2.副次 3.その他 ()
	5		1.主要 2.副次 3.その他 ()
	6		1.主要 2.副次 3.その他 ()
主な結果	全例の 1,3,5 年生生存率は 66%, 33%, 22%。多変量解析により、リンパ節転移 (p=0.002)、随伴症状 (p=0.005)、転移巣 (p<0.001)、肉腫様変化 (p=0.003) と TSH 値 (p=0.038) が有意に生存率と相関した。そこでこれらの因子をスコア化して、low-risk, intermediate-risk, high-risk の 3 群にわけると各 1,3,5 年生生存率は low 群が 92%, 61%, 41%, intermediate 群が 66%, 31%, 19%, high 群が 1%, 0%, 0% であった。		
結論	有転移腎癌に対する腎摘+IL2 療法の手後は、リンパ節転移、随伴症状、転移巣、肉腫様変化、TSH 値をスコア化することにより予測可能である。		
備考	サイトカイン療法 の CQ と重複する可能性あり。		
レビュワーコメント	レビュワー氏名	大園誠一郎	
	レビュワーコメント		

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	腎臓がん	
	タイプ	臨床専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	A scoring algorithm to predict survival for patients with metastatic clear cell renal cell carcinoma: A stratification tool for prospective clinical trials.	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	CQ9	
書籍情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタ分析 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.非比較試験 6.コホート研究 7.症例対照研究 8.症例集積 9.症例報告 10.横断研究 11.比較観察研究 12.非比較観察研究 13.その他 (4)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	J Urol	
	雑誌 ID		
	巻	174	
	号	5	
	ページ	1759-1763 Discussion 63	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本文語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	2005.		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Leibovich BC et al	Mayo Clinic
	その他著者 1		
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	転移を有する淡明細胞腎細胞癌患者の癌疾患特異生存率を予測するための臨床的に有用なスコア化されたアルゴリズムを構築する。	
	研究デザイン	Evidence level 3 b	
	セッティング	Mayo Clinic	
	対象者	根治的腎摘除術を施行した腎癌患者で、組織型が淡明細胞癌であり、手術時に既に転移を認めた 285 名と手術後に転移が出現した 442 名を対象。手術平均年齢 61 歳 (24-85 歳)。	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず (3)	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (22)	
	介入 (要因曝露)	転移を有する腎細胞癌に対する根治的腎摘除術	
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
	主な結果	1	性別、腎摘出時の症状(全身症状を含む)
2		腫瘍嚢栓の有無及びレベル	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
3		原発巣のサイズ、T 分類、所見リンパ節転移、核異型、嚢栓の凝固壊死の有無	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
4		ザルコーム様分化 Cancer specific survival(転移出現時期から死亡及び最終経過観察期まで)	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
5			1.主要 2.副次 3.その他 ()
結論	根治的腎摘除術を施行し、組織型が淡明細胞癌であり、手術時に既に転移を認めた 285 名と手術後に転移が出現した 442 名を対象。手術時平均年齢 61 歳(24-85 歳)。後者の 442 名で、腎摘出後、転移が出現するまでの期間は平均 1.3 年(0-25 年)。全体の癌疾患特異生存率は、転移出現後、0.5, 1, 2, 3, 4, 5 年でそれぞれ、74.9, 56.3, 35.3, 25.4, 19.4, 15.0%であった。単変量解析では、全身所見を有する、肝転移を有する、転移出現が腎摘出時より 2 年以内、腫瘍嚢栓が下大静脈内に存在、リンパ節転移を有する、原発巣の核異型が強い、凝固壊死を有する、ザルコーム様分化を認めるが有意な negative predictive factor であり、転移巣が根治切除されているが positive predictive factor であった。Multivariate 解析では、肝転移を有する、転移出現が腎摘出時より 2 年以内、転移巣が根治切除されている、原発巣の核異型が強い、凝固壊死を有するが強い因子として残り、以上から因子をスコア化した。1 年後の癌疾患特異生存率は、スコアが 5 から 1 で 85.1%, 0 から 2 で 72.1%, 3 から 6 で 58.8%, 7 から 8 で 39.0%, 9 以上で 25.1%であった。		
備考	このスコアリングアルゴリズムは、転移を有する淡明細胞腎細胞癌の癌疾患特異生存率を予測するのに有効であると思われた。スコアが最も高い群では、prospective な臨床試験を積極的に推し進めるべきであり、転移巣が摘出可能な場合には、積極的な外科的アプローチにより予後が改善される。		

レビューワーコメント	レビューワー氏名	増田 均
	レビューワーコメント	原発巣摘出時に既に認めた転移と手術後に出現した転移では、生物学的特性が同じか。今回はまとめて、検討しているが、どのような差が存在するか。